

Title	マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の第三～第六章をめぐって (2)
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学論集. 5 p.267-p.290
Issue Date	1991-07-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79543">https://hdl.handle.net/11094/79543</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# マスウーディー著『黄金の牧場と宝石の鉱山』の 第三～第六章をめぐって（2）

竹 田 新

## IV （第三章の翻訳）

### 第3章 始まり、万物の創造、人類の創造、の叙述

（§34）マスウーディーは言った。イスラーム教徒の全宗派（milla）の者はアッラー（Allāh）—至高至大におわす—が万物を何のひな型もなしに、無から創り出し給うたことで意見を一つにしている。<sup>1)</sup>そして、次のような話がイブン・アッバース（Ibn ‘Abbās）などから語り伝えられている。<sup>2)</sup>アッラー—至高至大におわす—が創り給うた最初の物は水であり、アッラーの王座は水の上にあった。<sup>3)</sup>アッラーは創造に取り組もうと欲し給うた時、水から煙（＝水蒸気）を取り出し給うた。煙は水の上に立ち昇り、天と名付けられた。<sup>4)</sup>次いで、アッラーは水を干し、一つの地となし給うた。次いで、その地を引き裂き、七つの地となし給うた。<sup>5)</sup>日曜（1の日）と月曜（2の日）の二日のことである。またアッラーは地を巨魚（ḥūt）の上に創り給うた。その巨魚はアッラーがクルアーンの“筆にかけて、彼らの書き記すものにかけて”[という章]の中で述べ給うたものである。<sup>6)</sup>巨魚は水の中に、水は滑らかな石塊の上に、石塊は天使の背の上に、天使は岩の上に、岩は風の上にあった。その岩は、アッラー—いと高くおわす—がクルアーンにおいて、ルクマーン（Luqmān）が息子に語った言葉“息子よ、たとえ芥子一粒の目方のものであっても、それが岩の中か天か地にあっても、アッラーはそれを持ち出されるぞ。まことにアッラーは明敏なるお方、あまねく通曉し給うお方である”の中で述べ給うたものである。<sup>7)</sup>巨魚が動揺すると、地が揺れた。そこでアッラーが地の上に山々を据え給うと、地は落ち着いた。それはアッラー—いと高くおわす—の御言葉“またかれ（＝アッラー）は、地に不動の山々（rawāsin）を据え給うて、お前たちと共に動揺なきようになされた”にある。<sup>8)</sup>アッラーは地に山々を創り、地に住む者の食糧、地の木々、地に必要な物を創り給うた。<sup>9)</sup>[以上]火曜（3の日）と水曜（4の日）の二日である。それはアッラー—いと高くおわす—の御言葉“言ってやれ、お前たちは、二日間で地を創造し給うたお方に背を向け、このお方に対等者を併置するのか。万界の主であらせられるのに。それ（＝地）の上に不動の山々を置かれ、祝福を与えられ、四日間で、求める者たちに応じてその糧をお計りになられた。次いで、まだ煙であった天に昇り給うた。天と地に向かって、「好むと好まざるとにかかわらず、双方とも来るがよい」

と言い給うた。両者は、「喜んで参上いたします」と言った”にある。<sup>10)</sup>

(§ 35) その煙は水が呼吸をした時に、水の息からできたのだが、アッラーは煙を一つの天となし給うた。次いでアッラーは天を引き裂き、七つとなし給うた。<sup>11)</sup>木曜(5の日)と金曜(al-Jum‘a)の二日のことである。ジュムア(al-Jum‘a)と名付けられたのは、アッラーがこの日に諸天と地の創造を合わせ給うた(jama‘a)からである。次いでアッラー—いと高くおわす—は「“そしてかれはそれぞれの天にその使命を啓示し給うた”」と言い給うた。<sup>12)</sup>それはアッラーがそれぞれの天に天使たちと海洋と氷の山々を創り給うたことを意味する。<sup>13)</sup>

(§ 36) 一番下の天は翠玉から、第2の天は白銀から、第3の手は紅玉から、第4の天は白真珠から、第5の天は黄金(赤きこがね)から、第6の天は黄玉から、第7の天は光からできている。アッラーは第7天を天使たちで覆い給うたが、天使たちは、アッラーの近くにいたので、アッラーを讃えて片脚で立っている。彼らの脚は第7の地を貫き、その足は第7の地の下、500年行程のところに落ち着いた。また、彼らの頭は玉座の下にあるが、玉座に届くことはない。彼らは、「“栄光に満ちた、玉座の主”“アッラーのほかには神はない”」と言っているが、彼らは創造されて以来、かの時(=最後の審判)がやって来るまで、そうしている。<sup>14)</sup>玉座の下には、人間と動物の糧が齎される一つの海があり、アッラーがその海に命じ給うと、海はアッラーの望み給う雨を一つの天から別の天に降らし、その雨はアブラム(al-Abram)と言われる場所まで達する。<sup>15)</sup>そこでアッラーは風に命じ給う。風はそれを雨雲まで運び、雨雲がそれを篩にかける。一番下の天の下には、地の諸海にいるような動物で満ち満ちている水からなる一つの海があり、アッラーの御力で支えられ[落ちて来ない]。

(§ 37) アッラー—いと高くおわす—は地の創造を終え給うた時、地の面にアダム(Ādam)より先にジンたち(jinn)を住まわせ給うた。<sup>16)</sup>ジンたちを“煙のない火から”創り給うたが、イブリース(Iblīs)もその中に含まれていた。<sup>17)</sup>アッラーはジンたちに獣の血を流すことや仲間うちで争うことを禁じ給うた。ところが、彼らは血を流し、互いに害し合った。イブリースは彼らがこうした行為を止めないのを見た時、アッラーに自分を天へ上げてくれるよう求めた。その結果、イブリースは天使たちと共に、アッラーをこの上なく崇めるようになった。アッラーはジンたち—彼らはイブリースと同じ仲間である—に、天使たちの一団を遣わし給うた。天使たちはジンたちを諸海の島々へ追いやり、アッラーが望み給うたジンたちを殺した。そして、アッラーはイブリースを一番下の天の見張り番となし給うた。ところが、イブリースの心に傲慢な気持ちが頭をもたげたのである。

(§ 38) 次いで、アッラー—至高至大におわす—はアダムをお創りになることを望み、「“わしは地上に代理者を置こうと思う”と天使たちに”言い給うた。<sup>18)</sup>すると、天使たちは「我らが主よ、その代理者とは何者なのでしょうかと」言った。<sup>19)</sup>アッラーは「その者には、地上で害をなし、互いに妬み合い、殺し合う子孫ができることになろう」と言い給うた。天使たちは「我らが主よ、“あなたはそこ(=地)に、害をなし地を流す者をお置きになるのですか。私

たちがあなたの栄光を褒め讃え、あなたを崇めておりますのに」と言った。かれは「わしはお前たちの知らないことを知っている」と言い給うた。<sup>20)</sup>それからアッラーはガブリエル (Jibril) を地に遣わし給うた。<sup>21)</sup>地から粘土を持ってこさせるためであった。ところが、地がガブリエルに「あなたが私を減らすことがないよう、私はアッラーにお縋り申す」と言ったので、ガブリエルは地から何も取らずに立ち戻った。次にアッラーはミカエル (Mikā' il) を遣わし給うた。<sup>22)</sup>すると、地はミカエルに同様なことを言った。それで、ミカエルは何も取らずに戻って来た。そこで、アッラーは死の天使を遣わし給うた。<sup>23)</sup>地が死の天使から逃れようとアッラーに縋ると、死の天使は「アッラーの御命令を果さずに帰ることがないよう、私はアッラーにお縋りする」と言い、黒と赤と白の土を取った。そのことにより、アダムの子孫(=人類)は様々な色をして現れ出るようになった。アダムと名付けられたのは、地の表皮 (adīm) から取られたからである。<sup>24)</sup>その他の説もある。

(§ 39) アッラーは死の天使に死ということを任せ給うた。そして、アッラー——いと尊く、いと高くおわす——はその粘土を捏ね、放置し給うと、ついに40年でそれは互にくっつき合うねばねばした粘土となった。その後、更に放置し給うと、ついに40年でその粘土は悪臭を放ち、変質した。それはアッラー——いと高くおわす——の御言葉 “masnūn な粘土から” にあり、masnūn とは、悪臭を放つということである。<sup>25)</sup>次いで、アッラーはその粘土に形を与え、霊のない、“陶器のような ṣalṣāl (乾いた音のする粘土) から “なるままに放置し給い、ついに120年が過ぎ去った。<sup>26)</sup>40年とも言われている。そのことはアッラー——いと高くおわす——の御言葉 “人間には、[人間と] 呼ばれるほどのこともなかった時期があったではないか” にある。<sup>27)</sup>そこで、天使たちはその粘土のそばを通しては、それを恐ろしく思っていた。<sup>28)</sup>彼らの中で最も怖がっていたのは、イブリースであった。イブリースはその粘土のそばを通ると、脚でそれを蹴るのが常であった。すると、陶器から出るような音が響き、かちゃかちゃという音 (ṣalṣala) をたてるのであった。それはアッラー——いと高くおわす——の御言葉 “陶器のような ṣalṣāl から” にある。ṣalṣāl とは、我ら (=私) が述べたものではないとも言われている。イブリースはその粘土の口から入り込み、その尻から出てきては「何かのためにお前は創られたのだ」と言うのが常であった。

(§ 40) アッラーはその粘土の中に霊を吹き込もうと欲し給うた時、“天使たちに向かって「アダムに跪拝せよ」”と言う給うと、“彼らは跪拝したが、イブリースだけはこれを拒み、高慢であった。”<sup>29)</sup>そして、彼は「我が主よ、“私は彼 (=人間) よりも優れている。あなたは私を火からお創りになられた。しかるに、彼を粘土からお創りになられた。”火は粘土より貴い。私は地に代理として任じられていた者である。私は羽毛 [の服] を纏い、光の飾り帯を付け、気高さの冠を戴いている。私はあなたの天と地においてあなたを崇めた者である」と言った。<sup>30)</sup>すると、アッラーはイブリースに、“それならここ (=楽園) から出て行け。まことにお前は呪われた者だ。審判の日まで、わしの呪いがお前の上にあろう”と言う給うた。<sup>31)</sup>そこで、イブリースは

“彼ら（＝人間）が呼び起こされる日まで” 猶予を求めた。<sup>32)</sup>アッラーは“定めの際のその日まで” 彼に猶予を認め給うた。<sup>33)</sup>イブリースには、アダムに跪拝するよう命じられた意味が分からなかったのである。

（§ 41）人々の中には、アダムは、跪拝するよう命じられた者たちにとってのミフラブ（miḥrāb, モスクにある、メッカの方角を示す壁龕）で、それ（＝跪拝すること）が目指す対象は創造者――至高至大におわす――であり、この命令を受け入れ、命令に従うことは、命令を課せられた者たちにのしかかる試練、苦難の過程と考える者がいるが、他の考えの者もいる。それから、アッラーは御自身の霊をアダムの中に吹き込み給うた。霊がアダムの身体の一部に降りて来る毎にアダムは座るようになっていった。<sup>34)</sup>そこでアッラーは「“人間はあわて者に” 創られた」と言い給うた。<sup>35)</sup>霊がアダムの中に入り過ぎた時、アダムはくしゃみをした。<sup>36)</sup>するとアッラーは「アダムよ、“アッラーに讃えあれと言え”、さすれば、お前の主はお前を祝福するだろう」と言い給うた。<sup>37)</sup>

（§ 42）マスウーディーは言った。被造物の始まりについて我らが述べた情報は、シャリーア（sharī‘a, 聖法）によるものであり、後代の者が前代の者から、現在の者が過去の者から伝え聞いて語ったものである。我らは世界の発出（ḥudūth）を立証する諸徴、世界に生成を明示する証拠と共に、我らに伝わった彼らの言葉どおりに、また我らが彼らの書物に見付けたとおりに、彼らの言うところを述べたのである。そして、これと見解を同じくし、これに従う、発出を主張する諸宗派の者たちの言も、彼ら以外の者で、これと見解を異にし、先在（qidam）を主張した者たちへの反論も、述べようとしなかったが、それは、我らが先の書物、前の著作の中でそのことを述べたからである。また、我らは本書の多くの箇所、理論・論証・論議の学（＝哲学や論理学）が扱う、数多くの思想や信条に関する大体のところを述べたが、それは知るところをそのまま伝えたものである。

（§ 43）次のような話が、信徒たちの長、アリー・ブン・アビー・ターリブ（‘Alī b. Abī Ṭālib, アブー・ターリブの息子アリー）から述べ伝えられている。アッラー――いと高くおわす――は創造の決定、人類の創造、被造物の創出を望み給うた時、地を拡げて天を上げるより前に、人間たちに塵の小片のような姿を与え給うた。アッラーは、その王権が無比、その威力が無二であらせられ、御自身の光を少し、御自身の輝きを一部流し給うと、光は輝いた後、この目に見えぬ姿の中心に集り、我々の預言者ムハンマド（Muḥammad）――アッラーが彼を祝福し、救い給うように――の姿となった。<sup>38)</sup>そこで、アッラー――至高至大におわすと誰もが言う――は、「お前はよりすぐられ、選ばれた者である。お前のもとには、我が光の保管所、我が導きの宝庫がある。お前のために、川床を広げ、水を自由に進ませ、天を上げ、報酬と懲罰、楽園と業火を設けよう。そして、お前の家の者たちを導きのために据え、その者たちには、我が知識の秘密を一部、何一つ隠されていないように、不可知でないようにして明かすと共に、その者たちを我が被造物に対する我が証となし、我が全能性と我が唯一性とを知らせる者となそう」と言い給うた。<sup>39)</sup>

(§44) 次いで、アッラー—讃えあれ—は主たることの証言と、唯一たることの信仰とを〔彼らから〕取りつけ給うた。それらを取つけた後で、人間の知力の中にムハンマドと彼の家の者たちとの選出を混ぜ給うた。そして、導きが彼と共にあり、光が彼に属し、イマーム位(imāma)が彼の家の者にあることを人間に示し給うたが、それは正義の道を先に知らせるべく、予め警告をしておくためであった。<sup>40)</sup>その後、アッラーは被造物を御自身の不可知なものの中に包み隠し、御自身の不可思議な知識の中に覆い隠し給うた。次いで、万界を設け、時間を広げ、水に自由な流れを与え、泡を立たせ、煙を沸き上がらせ給うた。<sup>41)</sup>すると、アッラーの玉座は水の上に浮かんだ。そこで、アッラーは地を水の面に広げ、水から煙を取り出し、その煙を天となし給うた。それから、天と地に、服従するよう求め給うた。両者はその求めに従った。アッラーは次に、無から創り出した光と新たに生み出した霊とから天使たちを創造し給うた。そして御自身の唯一性に、ムハンマド—アッラーが彼を祝福し、救い給うように—が預言者たることを結び付け給うた。それで、このこと(＝ムハンマドが預言者たること)は彼が地上に遣わされる前に、既に天では知られていた。

(§45) アッラーはアダムを創り出し給うた時、天使たちにアダムの優越性を明らかにし、アダムにだけ前もってお授けになった知識を彼らに示し給うたが、それは、アッラーがアダムに諸物の名を尋ね給うと、彼がそれらの名を天使たちに知らせることを通してであった。<sup>42)</sup>そしてアダムを一つのミフラブ、一つのカアバ(Ka'ba, メッカにある立方体の神殿)、一つの門、一つのキブラ(qibla, 礼拝の方向)となし、敬虔な〔霊的存在〕(＝天使)、光たる霊的存在を彼に向かって跪拝させ給うた。次いでアッラーは天使たちの目前でアダムをイマーム(imām)と呼び給うた後、彼に預けられた物について知らせ、彼に任せた物の重要さについて明らかにし給うた。それでアダムの善き分け前は我々の光の預かり手として称讃されることであった。<sup>43)</sup>そしてアッラーは、清い流路(＝血筋)の中でムハンマドを選び出すまで、その光を時〔の帳〕の下に隠し続け給うた。<sup>44)</sup>ムハンマドは人々に外でも内でも呼びかけ、裏でも表でも彼らを誘った。ムハンマド—彼の上に平安あれ—は人間がこの世に生まれる前にアッラーが人間と予め立て給うた契約を思い出すよう強く求めた。<sup>45)</sup>上述した光の燈火のきらめきに出会った者は、自分の秘密へと導かれ、自分の実体をはっきり知った。そして不注意のために見えなくなった者は〔アッラーの〕御怒りを受けたのは当然であった。

(§46) かの光はその後(＝ムハンマドの後)、我々の中でも最も高貴な者たちへと伝わっていき、我々のイマームたちと共に輝いた。<sup>46)</sup>それゆえ我々は、天の光でもあり、地の光でもある。我々によって救いがあり、我々からかの隠れた知識が出て、我々へと全ての物事が向かうのである。また、我々のマフディー(mahdī, アッラーに導かれた者で、終末に現れる救世主)によってアッラーの証が断ち切られる。彼こそイマームたちの封印、ウンマ(umma, イスラーム共同体)の救済者、光の目標、全ての物事の根源である。そして我々は、被造物のうち最も優れた者、存在物のうち最も高貴な者、万界の主の証である。<sup>47)</sup>それゆえ我々の保護を握みとり、我々の腕

を掴んだ者に恩寵を楽しませよう。これは信徒たちの長アリー・ブン・アブー・ターリブからの話を、アル＝フサイン(al-Husayn)・ブン・アリー、アリー・ブン・アル＝フサイン、ムハンマド・ブン・アリー、アブー・アブド・アッラーフ・ジャアファル(ʿAbū ʿAbd Allāh Jaʿfar)・ブン・ムハンマドが次々と伝え聞いて語ったものによっている。<sup>48)</sup>我らはこれらの情報のイスナード(isnād, 伝承の過程の記録)や経路の多くを述べようとはしなかった。これらの情報は全て、それを我らが伝え聞き依拠した人物との伝達関係と共に、先に著した書物の中で述べたからで、本書で幾度も長々と述べるのを恐れてのことである。

(§ 47) トーラー(at-Tawrāh, モーセ五書)にあったのは、次のようなものである。<sup>49)</sup>アッラー—いと高くおわす—は創造を月曜日に始め、土曜日に全てをなし終え給うた。それでユダヤ教徒(al-Yahūd)は土曜日を祭日とした。また福音書(al-Injīl)の民は、キリスト(al-Masīh)が日曜日に彼の墓から復活したと主張し、その日を祭日とした。他方、[イスラーム教徒の]法学者や伝承学者の大多数が従う意見はと言えば、次のようなものである。創造の開始は日曜日で、終了は金曜日であった。<sup>50)</sup>この金曜日に霊がアダムに吹き込まれた。4月6日のことである。次いでエバ(Hawwāʾ)がアダムから創り出された。<sup>51)</sup>二人は3時間後、楽園(al-janna)に住まわされ、そこに3時間留まった。<sup>52)</sup>つまり、4分の1日、現世の250年である。<sup>53)</sup>それからアッラーはアダムをセイロン島(Sarandīb)に、エバをジェッダ(Judda)に、イブリースをバイサーン(Baysān)に、蛇をイスファハーン(Iṣbahān)に落とし給うた。<sup>54)</sup>アダムはインド(al-Hind)のセイロン島にあるルフーン(ar-Ruhūn)山に落ちたが、身体を覆う幾枚かの楽園の葉を付けていた。葉は乾くと、風に撒き散らされ、インドの国に散らばった。<sup>55)</sup>

(§ 48) アッラーが最もよく知り給うが、インドの地に香料が存在する原因はこれらの葉にあると言われる。<sup>56)</sup>またそれ以外の説もある。このことによって沈香、丁香、香花、麝香、その他の香料がインドの地に特有の物となった。またかの山では鋼玉と金剛石が輝き、島々では金鋼砂が取れ、海底には真珠の採取場がある。<sup>57)</sup>アダム—彼の上に平安あれ—は楽園から落とされた時、小麦一穂と実の付いた楽園の小枝30本を持ち出した。<sup>58)</sup>それらのうち10本は外皮を持っている。<sup>59)</sup>胡桃、扁桃、榛、ピスタチオ、罌粟、栗、石榴、インド胡桃、バナナ、団栗である。他の10本は核を持っている。桃、杏、李、棗椰子、七竈、浜棗、山査子、棗、椰子、桜桃である。<sup>60)</sup>残りの10本は外皮がなく果肉に薄皮がなく内部に核がない。林檎、花梨、葡萄、洋梨、無花果、桑、シトロン、大胡瓜、胡瓜、メロンである。<sup>61)</sup>

(§ 49) 次のように言われる。アダムがエバと楽園から落とされた時、二人は離れ離れに落ちたが、アラファート(ʿArafāt)と呼ばれる場所で互いを知った(taʿārafā)。<sup>62)</sup>その場所は二人がそこで互いを知ったことからアラファートの名で呼ばれるようになった。それ以外の説もある。アダム—彼の上に平安あれ—はエバを欲して彼女と交わった。彼女は一人の男の子と一人の女の子を身籠った。男の子はカイン(Qāyin)、女の子はレブダ(Lūbadā)と名付けられた。<sup>63)</sup>その後、アダムは再び交わり、エバはまたもや男の子と女の子を身籠った。男の子はアベル

(Hābil)、女の子はクリミア (Iqlīmiyā) と名付けられた。<sup>64)</sup>二人の息子のうち第1子の名に関しては、論争があり、啓典の民 (ahl al-kitāb) などの大半は、我らが述べたように、その子の名はカインであると述べている。その名はアベルであると考えた者もいるが、これは一部の者の意見であり、圧倒的多数は我らが先に述べた意見である。アリー・ブン・アル＝ジャフム ('Alī b. al-Jahm) は、万物の始めと創造に関する彼の長詩 (qaṣīda) の中でそのことを述べ、次のように言っている。<sup>65)</sup>

彼らは息子を得、その子はカインと名付けられた。 彼らは彼の成長を見守った。

アベルは若者となり、カインも若者となった。 二人の間には変わるところがなかった。

(§50) 啓典の民は次のように述べている。アダムはアベルの妹 (or 姉) をカインに、カインの妹 (or 姉) をアベルに娶わせて、2回の懐妊による子供たちを結婚において互いに分けた。<sup>66)</sup>これは、赤の他人との結婚によって子孫を得ることができない緊急の場合に、近親血族間の結婚をできるだけ避けようとするアダム — 彼の上に平安あれ — の習慣であった。拝火教徒たち (al-Majūs) は、アダムは異なる懐妊による子供たちを相互に結婚させなかったし、こうした結婚を求めなかったと、主張している。彼らはこの点で、兄弟をその姉妹と、母をその息子と結婚させることを正常な好ましいことだとする秘義を持っている。それについては『時代の情報と、時の運命に滅ぼされた過去の民族やいにしへの世代や消え去った王国の情報』と名付けられた我らの書の第14章で述べている。<sup>67)</sup>

(§51) アベルとカインは供物を捧げた。<sup>68)</sup>アベルは彼の最上の羊と最良の食べ物を選んで捧げ、カインは彼の最低の持物を選んで捧げた。そこで二人には、アッラーが御啓典の中で語り給うた、カインによるアベル殺害が起こった。<sup>69)</sup>そして次のように言われる。カインはアベルを低地の荒野で不意打ちしたが、それはシリア (ash-Shām) の土地のダマスクス (Dimashq) 地方においてのことで、石で打ち殺したのである。また次のように言われる。野獣はそこから人間を嫌うようになったが、それは人間が悪行と殺害を始めたということである。カインはアベルを殺した時、その死体を隠すのに困り、担いで地を歩き回った。そこでアッラーは1羽の鳥をもう1羽の鳥のもとに遣わし給うた。一方が他方を殺して、それを地に埋めた。カインは悲しみ、それについてクルアーンが語っていることを言った。「ああ情けない。俺はこの鳥のようにもなれないのか。弟の死体を隠すこともできないで」。<sup>70)</sup>そしてカインはアベルを埋めた。アダムはそのことを知った時、嘆き悲しみ、恐れ戦いた。

(§52) マスウーディーは言った。人々の間に、アダムの作とする詩が広まった。それは、アダムが息子のことを嘆き、彼を失ったことを悲しんだ時に詠んだもので、彼のことを嘆いて次のように言う。<sup>71)</sup>

国もそこにいる者も変わり、 地の面は埃に覆われ醜い。

味と色を持つものはどれも変わり、 美しい顔の微笑みが希となった。

地に住む者は御柳や苦い実と交換した、 楽園の広大な園を。



執念深い敵が我らの隣に住んだ、それは呪われ、死なないので我らは心の安らぐことがない。  
カインはアベルを不当に虐殺した、ああ、あの美しい顔が何と哀れなことよ。  
どうして私は心行くまで涙を流さずにおられようか、アベルが墓の中に入ってしまったのに。

私は生涯、悲しみを背負う、私は一生、心の安らぐことがない。<sup>72)</sup>

（§ 53）私は歴史や伝記や系図に関する多数の書物の中に見付けたのだが、アダムがこの詩を口に出した時、イブリースが声は聞こえるが姿は見えないまま彼に答えて、次のように言っている。

国とその住民のもとから立ち去れ、地上では、広々とした土地もお前には確かに狭くなった。

お前は妻エバとここにいた、アダムよ、この世の苦しみから安らぎを得て。

だが、わしの策略と計略は止めぬ、かの褒美（＝楽園）がお前から離れ去るまで。

もし最も力強いお方（＝アッラー）の御慈悲がなければ、起こるだろう、永遠の園から一陣の風がお前を追ひ払うことが。<sup>73)</sup>

（§ 54）また私は別の写本の中に、この詩で我らが既に述べたものではない、独立したもう一つの詩句を見付けた。それは、アダムには声は聞こえたが姿は見えないまま、次のように言うものである。<sup>74)</sup>

アベルの父よ、二人は共に殺され、生者は犠牲の死者のようになった。<sup>75)</sup>

（§ 55）アダムはそれを聞いた時、過ぎ去った者と残っている者のことを一層嘆き悲しみ、殺した者が殺された者と同じことを知った。そこでアッラーは彼に、「まことに我はお前から我が光を出し、その光が清い流路と高貴な根源の中を進んでいくことを欲する。我が光を他の全ての光と競わせ、その光を預言者たちの封印となし、その光の一家を最良のイマームたち、後継者たちとなし、彼らの生存期間でもって時間を封印し、彼らの呼びかけでもって地上を満たし、彼らに従う者たちでもって地上を輝かせよう。<sup>76)</sup>それゆえ、我が名を唱え、心身を清め、我を崇め、讃美せよ。<sup>77)</sup>しかる後にお前の妻と、彼女が清らかな時に寢床を共にせよ。さすれば、我が預けた物（＝我が光）はお前たち二人から、お前たちの間に生まれる子に移るであろう」と啓示し給うた。

（§ 56）アダムがエバと交わると、彼女はすぐさま身籠り、額は輝いた。かの光は彼女のほくろを照らし、眼窩で光った。月が満ち、彼女は子を産んだが、その子は、ありうる男の中で最も気高く、最も威厳に満ち、最も見目麗しく、最も完璧な、最も均整のとれた身体を持ち、光と畏敬に包まれ、威厳と威信に飾られていた。かの光はエバから彼に移ると、彼の額の皺の中で輝き、額に集まった。そこでアダムは彼をセト（Shīth）即ちアッラーの賜り物と名付けた。<sup>78)</sup>彼が成長し、青年となり、成熟し、思慮分別がつくようになると、アダムは彼にその教訓（waṣīya）を示唆し、自分の預かった物の在りかを教え、彼が自分の後はアッラーの証、地上におけるアッラーの代理人、アッラーの真理を後の者たちに導く者であること、彼が清い種子と輝かしい胚種

の2番目の受託者であることを知らせた。アダムはセトに教訓を伝えた時、セトはそれを内に秘め、隠れたままにしておいた。

(§57) アダムに死が訪れ、来世への旅立ちが近付いた。彼は4月6日の金曜日、彼が創造された時間に死去した。アダム—彼の上に平安あれ—の年令は930歳であった。<sup>79)</sup>そしてセトがアダムの子供たちの後見人となった。<sup>80)</sup>アダムは4万人の子や孫を残して死んだと言われる。<sup>81)</sup>人々は彼の墓に関して論争し、ミナー (Minā) のハイフ (al-Khayf) モスクにあると主張する者もいれば、アブー・クバイス (Abū Qubays) 山の洞窟にあるという意見の者もいる。<sup>82)</sup>また他の説もあり、アッラーが事の真相を最もよく知り給う。

(§58) セトは人々を治め、父が授けられた聖なる諸文書 (ṣuhuf) と、自分に特別下された諸聖典 (asfār)・諸聖法を法と定めた。<sup>83)</sup>セトは妻と交わり、彼女はエノシュ (Anūsh) を身籠もった。<sup>84)</sup>かの光は彼女に移り、彼女が子を産むと、この子に移った。<sup>85)</sup>エノシュがかの教訓を理解できる年令に達した時、セトは彼にかの託された物のことと、それが彼らの名誉であることを示唆した。また、この名誉の真実と重大さを彼の子供たちに教えるように、そしてこの子供たちが自らの子供たちに教え、これを子孫が続く限りは伝えられていく教訓とするようにとも示唆した。この教訓は代々、伝えられ続けて、ついにはアッラーはかの光をアブド・アルムッタリブ ('Abd al-Muṭṭalib) へ、そして彼の息子アブド・アッラーフ即ちアッラーの使徒の父へと運び給うた。

(§59) しかしこれは、イスラーム諸宗派の者たちの間で、指定 (naṣṣ) だと主張した者と、選出を唱える者とが論争する点である。指定だと言う者たちは、イマームを奉じる者たち (ahl al-imāma, シーア派) で、アリー・ブン・アビー・ターリブと彼の子孫の清い人々とに従う者たち (shī'a) で、次のように主張する。アッラー—至高至大におおす—はいかなる時代も、アッラーのために真理を実践する者を欠くことのないようになし給い、その者は預言者たちであろうと、受託者たち (awṣiyā') であろうと、アッラーとその使徒により彼らの名と人格が指定されている。選挙を唱える者たちは、大都市の法学者、ムウタズィラ派 (al-Mu'tazila)、ハワリジュ派 (al-Khawārij) 諸分派、ムルジヤ派 (al-Murji'a)、ハディースの徒 (aṣḥāb al-ḥadīth) の多く、一般大衆、ザイド派 (az-Zaydiyya) の諸分派である。<sup>86)</sup>これらの者たちは次のように主張した。アッラーとその使徒はウンマに対して、一人の男を選んでその男をイマームとするように命じ給い、またある時代にはアッラーの証、即ちシーア派における無謬のイマームを欠くこともある。我らが既に記した、論争し合う両派の見解や相違に関して、若干の説明を本書の先の方です。

(§60) エノシュは地上を繁栄させ続けた。アッラーが最もよく知り給うが、セトがアダムの子孫の源で、アダムの他の子供たちはそれに当たらないと言われたが、その他の説もある。セトは912歳で死去した。<sup>87)</sup>エノシュの時代に、アダムの息子、弟アベルの殺害者カインが殺された。<sup>88)</sup>カインの殺害には、『時代の情報』や『中間の書』で既に述べた珍しい話がある。エノシュが死去

したのは10月3日で、960歳であった。<sup>89)</sup>彼には、ケナン(Qaynān)が誕生していた。かの光はケナンの額に輝き、契約が彼になされた。ケナンは国を栄えさせ、920歳で死んだ。<sup>90)</sup>彼が死んだのは7月で、彼にマハラルエル(Mahlā'il)が生まれた後のことであったと言われた。マハラルエルは800歳生きたが、イエレド(Yarad)が生まれ、かの光は受け継がれ、契約がなされ、真理が実践された。<sup>91)</sup>また次のようにも言われる。数多くの楽器(malāhin)が彼の時代に生み出されたが、カインの子供たちがこしらえたものである。<sup>92)</sup>

(§61) カインの子供たちとイエレドの間には、我らの書『時代の情報』の中で既に述べた戦争や話が幾つかある。<sup>93)</sup>セトの子供たちとカインの子供たちの間に分派が生じ、アダムを認めるインドの一種族は、カインの子供たちから出たこの分派に起源を持つ。<sup>74)</sup>この種族の地は、インドの地のクメール(Qumār)地方で、クメール沈香木は彼らの国に由来する。<sup>95)</sup>イエレドの生涯は962年で、彼が死去したのは3月であった。<sup>96)</sup>

(§62) 彼の後には、息子のエノク(Akhnūkh)が立ったが、これは預言者イドリース(Idrīs) — 彼の上に平安あれ — である。<sup>97)</sup>サービア教徒(aṣ-Ṣābi'a)は、エノクはヘルメス(Hirmis)だと主張する。<sup>98)</sup>ヘルメスの意味は水星である。アッラーが御啓典の中で、“高い地位に”昇らせたと述べ給うた人物である。<sup>99)</sup>地上における彼の生涯は300年であったが、それより多いという説もある。<sup>100)</sup>彼は縫い物をして針でかがった最初の者で、彼には30葉の聖なる文書が下された。<sup>101)</sup>これより前に、アダムに21葉の聖なる文書が、セトに29葉の聖なる文書が下されており、それらには、[アッラーへの]讃辞と祈りが記されている。

(§63) エノクの後、息子のメトシェラ(Mattūshalakh)が立って、国を栄えさせ、かの光は彼の額にあった。彼には子供たちが生まれたが、人々は彼の子供たちの多くについて語り、ブルガル人(al-Bulghar)、ルース人(ar-Rūs)、スラブ人(aṣ-Ṣaqāliba)は彼の子孫から出たと言った。<sup>102)</sup>彼の生涯は960年で、9月に死んだ。<sup>103)</sup>彼の後にはレメク(Lamak)が立ち、その時代には諸々の事件や人々の乱れがあった。<sup>104)</sup>レメクは777年の生涯で死去した。<sup>105)</sup>

(§64) レメクの後には息子のノア(Nūh) — 彼の上に平安あれ — が立ったが、地には退廃がはびこり、不正の闇が深かった。<sup>106)</sup>彼が地でアッラーへの信仰を呼びかけたところ、人々は背信と不信仰に終始した。<sup>107)</sup>そこでアッラーは彼らを呪い、ノアに「箱船を造るよう」に啓示し給うた。<sup>108)</sup>彼が船を造り終えると、ガブリエルがアダムの遺骨を収めた柩を持ってきた。<sup>109)</sup>ノアたちが船に乗り込んだのは、3月19日の金曜日のことであった。<sup>110)</sup>ノア及び彼の同伴者たちは船に乗って水の面に留まった。アッラーは地の全てを5か月にわたって沈め給うた。<sup>111)</sup>それからアッラーは地に対して、水を減らすように、天には、鎮まるよう命じ給い、船はジューディー(al-Jūdi)の上に止まった。<sup>112)</sup>ジューディーは、モースル(al-Mawṣil)地方の、バースーリーン(Bāsūrīn)とジャズィーラ・イブン・ウマル(Jazīrat Ibn 'Umar)にある山で、ジューディーとティグリス(ad-Dijla)との間は8パラサング(farsakh)である。<sup>113)</sup>そして船が止まった場所は最終的にこの山の頂である。

(§ 65) 次のようにも言われている。地には、その水をすぐには飲み込まなかった所もあれば、命令されると、ただちに飲み込んだ所もあった。命令に従った所は、掘るとその水が甘かったが、命令を受け入れるのが遅かった所は、掘ると塩辛い水や塩沼、塩山、砂丘という報いをアッラーは与え給うた。そして地が飲み込むのを拒んであとに残った水は、地の窪みに流れ下った。そこから海ができたのであり、海とは諸民族が滅ぼされ、地が拒んだ水の残りなのである。本書の中で後に、海の情報と海の様子を述べる。

(§ 66) ノア—彼の上に平安あれ—は、3人の息子セム (Sām)、ハム (Hām)、ヤフェト (Yāfith) および彼らの妻である3人の嫁、そして40名の男と40名の女と共に船から降り立った。<sup>114)</sup>彼らはこの山の麓へと下り、そこに一つの町を建設して、サマーニーン (Thamānīn) と名付けた。<sup>115)</sup>そして今日すなわち332年までその町の名となっている。この80名の後裔は絶え、アッラーはノアの3人の息子から人類の後裔を創り給うた。アッラー—至高至大におわす—はそのことをかれ—いと高くおわす—の御言葉“我ら (=アッラー) は彼の子孫を生き残るようにしてやった”によって知らせ給うた。<sup>116)</sup>この解釈 (ta’wīl) についてはアッラーが最もよく知り給う。ノアの子供たちのうち、あとに残り、彼が“息子よ、私たちと一緒に乗りなさい”と言ったのは、ヤーム (Yām) である。<sup>117)</sup>

(§ 67) ノア—彼の上に平安あれ—は地を息子たちの間に分け、彼らの各々に場所を割り当てた。そしてよく知られていることだが、息子ハムを彼と自分の間に起こった一件のゆえに呪って、「呪われよハム。奴隷たちの奴隷で、兄弟のためにあるように」と言った。<sup>118)</sup>また、「祝福あれセム。アッラーはヤフェト [の子孫] を殖やし給い、ヤフェトはセムの居所に留まるように」と言った。私はトーラーの中にノアが洪水の後350年間生きたとあるのを見付けた。<sup>119)</sup>それゆえノアの全生涯は950年である。尤もそれ以外の説もある。ハムは去り、彼の子供たちも従った。<sup>120)</sup>彼らは本書の中で後に述べるように、海や陸の諸々の居住地に落ち着いた。

(§ 68) 我らはヤフェト、セム、ハムの子供たちからなる [人類の] 後裔の地上での分散と居住地について述べよう。セムは地の中央、聖なる地からハド라마ウト (Ḥaḍramawt)、オマーン (‘Umān)、アーリジュ (‘Ālij) にかけて住んだ。<sup>121)</sup>セムの子らにはアラム (Aram) とアルパクシャド (Arfakhshad) がおり、アラムの子らには、アラムの子ウツ (‘Ūṣ) の子アード (‘Ād) がいる。<sup>122)</sup>彼ら (=アード一族) は砂地のアハカーフ (al-Aḥqāf) に居を定めていたが、[アッラーは] 彼らにフード (Hūd) —彼の上に平安あれ—を遣わし給うた。<sup>123)</sup>またアラムの子らには、アラムの子ゲテル (Ghāthar) の子サムード (Thamūd) がおり、彼ら (=サムード一族) はシリアとヒジャーズ (al-Ḥijāz) との間にあるヒジュル (al-Ḥijr) に居を定めていた。<sup>124)</sup>アッラーは彼らに同胞のサーリフ (Ṣāliḥ) を遣わし給うたが、彼らとサーリフとの間には、既に明らかになり、よく知られている事件が持ち上がった。<sup>125)</sup>我らは本書の中で後に、彼と彼以外の預言者たち—彼らの上に平安あれ—との情報を若干述べる。

(§ 69) [アラムの子らには] アラムの子ルド (Lāwidh) の二人の息子タスム (Ṭasm) と

ジャディース (Jadis) もおり、彼ら (=タムス一族とジャディース一族) はヤマーマ (al-Yamāma) とバハレイン (al-Baḥrayn) に居を定めていた。<sup>126)</sup>両者の弟 (or兄) イムリーク (‘Imlīq) [の一族] は、ある者は聖なる地に、ある者はシリアに居を定めたが、彼らのうちには、アマレク人 (al-‘Amālīq) がおり、各地に散らばった。<sup>127)</sup>他の弟 (or兄) ウマイム (Umaym) はファールス (Fāris) の地に居を定めた。<sup>128)</sup>我らは本書ペルシア人 (al-Furs) の系図に関する人々の論争という章で、カユーマルト (Kayūmarth) をルドの子ウマイムと同定した者について述べる。<sup>129)</sup>ウマイムはワバル (Wabār) の地に居を定めたとも言われている。<sup>130)</sup>そこは、アラブの歴史伝承者 (akhbārī) たちの主張によれば、ジンの支配する所である。

(§ 70) ウツの子アードの弟 (or兄) アビール (‘Abil) の子孫は、アッラーの使徒—アッラーが彼を祝福し、救い給うように—の町に居を定めた。<sup>131)</sup>またセムの子アラムの子マシュ (Mās) は、ユーフラテス (al-Furāt) の岸、バビロン (Bābil) の地に居を定め、マシュの子ニムロド (Nimrūd) が生まれた。<sup>132)</sup>彼はバビロンにかの塔を、ユーフラテスの岸にバビロン橋を建設した人物で、500年間統治し、ナバタイ人 (an-Nabaṭ) の王であった。<sup>133)</sup>彼の時代にアッラーは言葉を分け給うた。セムの子供たちの中では19の言葉、ハムの子供たちの中では17の言葉、ヤフェトの子供たちの中では36の言葉となし給うた。<sup>134)</sup>その後、言語は細かく分かれて、言葉がばらばらになった。我らは本書の中で後に、人々の離散と、バビロンの地で分かれた時に離散について詠まれた詩のことを述べる。<sup>135)</sup>また次のようにも言われている。ペレグ (Fālagh) が地を諸民族の間に分けた者で、このことによって彼は Fālagh、即ち分割者 (fālij) と名付けられた。<sup>136)</sup>

(§ 71) ノアの子セムの子アルパクシャドはシェラ (Shālakh) を産み、シェラは地を分けたペレグを産んだ。<sup>139)</sup>ペレグはアブラハム (Ibrāhīm) —彼の上に平安あれ—の祖先である。シェラはまた、エベル (‘Ābar) を産んだ。エベルの息子はカフターン (Qaṭṭān) であり、カフターンの息子はヤアルブ (Ya‘rub) である。<sup>138)</sup>ヤアルブは「幸福な朝を過ごされますように。災いを拒みますように」という王者の挨拶を子供たちから受けた最初の者である。<sup>139)</sup>また、彼ではなく、ヒーラ (al-Hīra) の或る王がこの挨拶を受けたのだとも言われている。カフターンは、我らが本書のイエメン人 (al-Yaman) の系図に関する人々の論争という章で述べるように、全イエメン人の父祖である。そして彼は考えを表現 (i‘rāb)、説明するために、アラビア語 (al-‘Arabīya) を話した最初の者である。

(§ 72) シェラの子エベルの子ヨクタン (Yuṭṭān) はジュルフム (Jurhum) の父で、ジュルフム [族] はヤアルブの父方のおじの子供たちである。<sup>140)</sup>ジュルフム [族] はイエメンに住み、アラビア語を話した者たちであったが、その後メッカ (Makka) に居を定め、我らが後で述べる彼らの情報にあるように、そこに落ち着いた。カトーラー [族] (Qaṭūrā‘) は彼らの父方のおじの子供たちである。<sup>141)</sup>その後、アッラー—いと高くおわす—はイシュマエル (Ismā‘īl) —彼の上に平安あれ—をメッカに住ませ給い、彼はジュルフム [族] と結婚した。それゆえ、彼らは彼の子供たちの母方のおじになる。

(§73) 啓典の民は次のように述べている。ノアの子セムの子レメクはまだ生きている。<sup>142)</sup>というのは、アッラー—いと尊く、いと高くおわす—はセムに、「我がアダムの身体のことを任せた者は、世の最後まで生き残らせる」と啓示し給うたからで、それは、セムが地の中央にアダムの柩を埋め、アダムの墓のことをレメクに任せたということである。セムが死去したのは9月の金曜日で、彼の年令はアッラーに召されるまで600歳であった。<sup>143)</sup>セムの後に立った者は、息子のアルパクシャドであった。アルパクシャドの年令はアッラーに召されるまで465歳で、死去したのは4月であった。<sup>144)</sup>アルパクシャドがアッラーに召された時、彼の後に息子のシェラが立った。シェラの年令は〔アッラーに召されるまで〕430歳であった。<sup>145)</sup>シェラがアッラーに召された時、彼の後に息子のエベルが立ち、国を栄えさせた。エベルの時代には、地の各所で諸々の事件や紛争が生じた。彼の年令はアッラーに召されるまで340歳であった。<sup>146)</sup>

(§74) エベルがアッラーに召された時、祖先の慣習に従って、彼の後に息子のペレグが立った。ペレグの年令はアッラーに召されるまで239歳であった。<sup>147)</sup>我らは彼のことを、言葉が混乱した時にバビロンで起こったことと共に、本書の前の方で既に述べている。ペレグがアッラーに召された時、彼の後に息子のレウ (Ar'û) が立った。<sup>148)</sup>レウの時代に暴君ニムロドが誕生したと言われている。レウの年令はアッラーに召されるまで200歳で、彼が死去したのは4月であった。<sup>149)</sup>レウがアッラーに召された時、息子のセルグ (Sârûgh) が立った。セルグの時代には、地上に生じた様々な原因によって偶像、画像の崇拜が現れたと言われている。彼の年令はアッラーに召されるまで230歳であった。<sup>150)</sup>

(§75) セルグがアッラーに召された時、祖先の例に倣って、彼の子ナホル (Nākhûr) が立った。<sup>151)</sup>ナホルの時代には、それまでの時代には経験されたことのない地変や地震が起こり、また、様々な器具や道具が生み出された。そして彼の時代には、戦争があり、インドなどで分立が生じた。彼の年令はアッラーに召されるまで146歳であった。<sup>152)</sup>ナホルがアッラーに召された時、息子のテラ (Tārah) が後に立った。彼はアラブハム—彼の上に平安あれ—の父アーザル (Āzar) である。<sup>153)</sup>当時、カナン (Kan'ân) の子ニムロドがいた。<sup>154)</sup>ニムロドの時代には、火と光の崇拜が地に齎され、その祭式が整えられた。そして戦争が起こったり、州 (kūra) や国 (mamlaka) が東西にできるなどして、地は大混乱をきたした。また、星とその法則とに関する言説が現れ、天体が描かれ、天体用の諸道具が作られ、それら (=星のこと) が人々に理解されやすくなった。占星術師たちはアブラハム—彼の上に平安あれ—が生まれる年の運勢とその運勢が何を引き起こすかを調べ、新しく生まれる子が彼らの占いを馬鹿にし、彼らの儀礼を消滅させることをニムロドに知らせた。そこでニムロドは新生児たちを殺すように命じたが、アブラハムは或る洞窟の中に隠されたのである。そしてアーザル、すなわちテラは死んだ。彼の年令はアッラーに召されるまで260歳であった。<sup>155)</sup>

### III の注の続き

p.290 1.33～p.297 1.14 [1章…持っている] (21) Dunlop (op.cit <注II—2>, pp. 102～03) は、こうした枠組はヤアクービーの歴史書の影響を受けたものかも知れないと言う。Pellat も、マスウーディーが知っていた書として挙げる Aḥmad b. Ya'qūb al-Miṣrī 著の歴史書 (§13) はヤアクービーのものではなからうかとしている (*Les prairies d'or*, I, Paris, 1962, p.vii) が、マスウーディーは明記していないとはいえ、そここで確かにヤアクービーの歴史を利用している (§153 [Ya'qūbī, I, p.92])。

p.297 1.15 [こうした…書き写され] (22) 本稿 I の注 8 参照。

p.297 11.16～18 [al-Bakrī…利用されてきた] (23) al-Bakrī の *al-Masālik wa-l-Mamālik* 『諸道と諸国』、Yāqūt の *Mu'jam al-Buldān* 『国々の辞典』、前述の Ibn Khaldūn の『実例の書』、al-Maqrīzī の *al-Mawā'iz wa-l-I'tibār fā Dhikr al-Khiṭaṭ wa-l-Āthār* 『新地と旧跡との陳述における警告と考慮』(地歴書)の他、al-Idrīsī (560/1165年没) の *Nuḥḥat al-Muṣṭalāq fī Ikhtirāq al-Āfāq* 『諸国踏破を熱望する者の楽しみ』(地理書)、Ibn Badrūn (608/1211年以後没) の *Sharḥ Qaṣīdat Ibn 'Abdūn* 『イブン・アブドゥーン長詩の解説』、Sibt Ibn al-Jawzī (654/1256年没) の *Mir'at az-Zamān* 『時代の鏡』(歴史書)、Ibn Sa'īd (673/1274年没) の *al-Jughrāfiyā fī l-Aqālīm as-Sab'a* 『7気候帯に関する地理』、al-Qazwīnī (682/1283年没) の *Āthār al-Bilād wa-Akhbār al-'Ibād* 『諸国の古跡と信者の情報』(地理書)、ad-Dimashqī (727/1327年没) の *Nukhbat ad-Dahr fī 'Ajā'ib al-Barr wa-l-Baḥr* 『陸と海との不思議に関する時代の精髓』(地理書)、Ibn Taymiyya (728/1328年没) の *Minhāj as-Sunna an-Nabawīya* 『預言者の言行の道』(宗教書)、an-Nuwayrī (732/1332年没) の *Nihāyat al-Arab fī Fiqh al-Adab* 『文学諸分野における必要の限度』(百科全書)、al-Qalqashandī (821/1418年没) の *Ṣubḥ al-A'shā fī Ṣinā'at al-Inshā'* 『作文術における夜盲の朝』(百科全書)、as-Sakhāwī (902/1497年没) の *al-I'lān bi-t-Tawbīkh li-Man Dhamma (Ahl) at-Ta'rīkh* 『歴史(家)を非難した者への公然たる非難』(歴史書)など。

p.297 11.18～21 [第1章…挙がっている] (24) § 8～14。その他、Abū Mikhnaḥ (157/774年没)、Ibn al-Kalbī (204/819年没)、Ibn Khurdādhbih (272/885年以後没) や、彼と同時代のタバリ、aṣ-Ṣūlī など(本稿p.284参照) も含まれている。

p.297 11.21～22 [この書…見られる] (25) § 308, 1419, 1442, 1509, 2243, 2863, 2920 など。なお、Wahb b. Munabbih は、その *al-Muḥtada'* 『創始』が § 126, 1204 など、Ibn Ishāq は、その *al-Muḥtada'* が § 1204, 3446 など、al-Wāqidi は、その *Futūḥ al-Amṣār* 『諸都市の征服』が § 747, 1529 など、al-Jāhiz は、その *al-Hayawān* 『動物』が § 432, 487, 845, 858, 863～65, 990 ほか、az-Zubayr b. Bakkār は、その *Ansāb Quraysh* 『クライシュ族の系譜』が § 1617, 1639, 1909, 1946 など、それぞれ利用されている。また、*Akhbār aṣ-Ṣīn wa-l-Hind* 『中国とインドの情報』など、明記されていないものからの引用も見られる (§ 174～83, 247, 329～33, 336～54, 366～70 ほか)。

p.297 11.23～24 [マスウーディー…言っている] (26) § 7。

p.297 11.25～26 [まず…ある] (27) 第7～17章など。

p.297 11.31～32 [そして…認められる] (28) 第7, 15, 25～30, 33～36, 63～68章など。

p.297 1.34～p.298 1.1 [彼…立っていた] (29) 第69章。

p.298 11.5～6 [この考え方…通じる] (30) Khalidi, p.63参照。

p.298 11.7～10 [その上…出ている] (31) 神光の伝播 § 43～46。ムハンマド関係が第70～74章に対して、アリー関係は第78～84章。ハサンのカリフ位は第85章。ウマイヤ朝期は第98章のウマル2世のカリフ時代(khilāfa)を除いて、第86, 89, 93, 94, 96, 97, 99～102, 104章と全て時代(ayyām)。

p.298 1.19 [マスウーディー…利用している] (32) 高い評価 § 11。作品の多用 § 1474, 1766, (1794)。

p.298 11.26～27 [タバリ…採用する] (33) Sīzā Qāsim, *Al-khiṭāb at-tārīkhī min at-taqyīd ilā al-irsāl qirā'at fī at-Ṭabarī wa-l-Mas'ūdī wa-Ibn Khaldūn*, Cairo, 1985, pp.30～34参照。

p.298 11.28～30 [歴史…意味した] (34) Khalidi, pp.41～42参照。

p.299 11.8～9 [また…挿入されている] (35) Pellat によれば、以下に翻訳する第3～6章 (§ 34～151)

においても、§ § 43~46, 48, 59, 68~72, 90, 115~16, 142~44が本文からそれている部分となる。

p.299 11.11~13 [同様な…飽きさせない] (36) マスウディーは第62章の終わり (§ 1369) などで、読者を楽しませ、飽きさせないことを心がけると言っているが、こうした心がけを彼が多用する al-Jāhiz の諸作品 (§ § 173, 217, 412, 955, 988~89, 1841, 2280~82, 3146~48, 3486~87, など) から教わっていたのかも知れない。

p.299 11.15~16 [それ…わかってくる] (37) 例えば、第1章 (§ § 1~18) では、1人称単数が § § 14, 16~17、複数が § § 1~7, 9, 12, 15~18。

p.299 11.17~18 [P.Lunde…示す] (38) Paul Lunde & Caroline Stone, *The Meadows of Gold The Abbasids by Mas'udi*, London, 1989, p.17

p.299 11.18~19 [ちなみに…ある] (39) *ibid.* また、khalidi (p.20) はマスウディーの簡潔なことばづかいを指摘する。

p.299 11.20~29 [彼…述べる。そこ…あろう。しかし…自覚した。というの…ある] (40) 特徴2つの強調は 'Ibar, I, p.52. 2つの引用箇所は共に 'Ibar, I, p.67. とは言え、『黄金の牧場』の個々の記述に対しては、馬鹿げたとか、不可能な話との批判が見られる ('Ibar, I, pp.13, 15, 58~61ほか)。

p.299 11.33~34 [この…冠した] (41) M.C.d' Ohsson, *Des peuples du Caucase*, Paris, 1828, p.v; G. Sarton, *Introduction to the History of Science I*, Baltimore, 1927, p.638. なお、“アラブ人のヘロドトス”は Nicholson (op.cit <注 I — 7>, p.353) にも見える。

#### IVの注

翻訳は Pellat の改訂版に基づくが、以下の注においては、アラブ世界ではよく使われる 'Abd al-Hamīd 版 (ed. Muḥammad Muḥyī ad-Dīn 'Abd al-Hamīd, 4 vols., Cairo, 1938) の相違点を示すと共に、情報源あるいは準同時代資料としての、Ibn Qutayba (d.270/883) の『知識の書』*Kitāb al-Ma'ārif* (ed. Tharwat 'Ukāsha, Cairo, 1960 <以下、Ibn Qutayba と略記>), al-Ya'qūbī (d.ca.284/897) の『歴史』*Ta'riḥ* (ed. M. Th. Houtsma, 2 vols., Leiden, 1883 <以下、Ya'qūbī と略記>), at-Tabarī (d.310/923) の『使徒達と王達の歴史』*Ta'riḥ ar-Rusul wa'l-Mulūk* (ed. M.J.de Goeje et al., 13 vols., Leiden, 1964-65 <以下、Tabarī と略記>) を比較対照する。なお、Yāqūt (d.626/1229) の *Mu'jam al-Buldān* (5 vols., Beirut, 1955~57) を Yāqūt, *The Encyclopaedia of Islam* (ed. M.Th.Houtsma et al., 4 vols., Leiden, 1913~36) を EI①, *The Encyclopaedia of Islam*, New Edition (ed. H.A.R.Gibb et al., Leiden, 1960-) を EI② と、それぞれ略記する。

- 1) “イスラーム教徒の全宗派の者”が、'Abd al-Hamīd 版では、“学者 (ahl al-'ilm)”となっている。
- 2) イブン・アッパースとは、'Abd Allāh b. (al-) 'Abbās のことで、預言者ムハマンドのいとこ (叔父の息子) に当たり、“ウンマ (イスラーム共同体) の学者”と称され、ムハマンドのハディース (聖伝承) を数多く伝えた。68/687~88年没。
- 3) 旧約聖書創世記 <以下、創世記と略記> 1:2 並びにクルアーン 11:7 参照。以下、§ 35 の終わりまで、同様な記事が Tabarī (I, pp.49~50, 51, 53) に、やはりイブン・アッパースに拠る話として載っている。また、アッラーが最初に創造したものは筆 (qalam) と考える説も多い (例えば、Tabarī, I, pp.29~33)。
- 4) 創世記 1:8 並びにクルアーン 41:11 参照。“天と名付けられた”が、'Abd al-Hamīd 版では、“かれ (= アッラー) はそれを天と名付け給うた”。
- 5) クルアーン 65:12 参照。
- 6) 引用部はクルアーン 68:1。但し 'Abd al-Hamīd 版では、“ヌーン。筆にかけて、…”となっている。そして、クルアーン 68:48 にその巨魚が登場する。同書 37:142 も参照。
- 7) 引用部はクルアーン 31:16。ルクマーンは、クルアーン第31章の名で、クルアーンでは、アッラーに知恵を授けられた (31:12) とあるが、クルアーンが啓示された当時、アラブ人の間で賢者として有名であった伝説上の人物。本『黄金の牧場』第4章では、ヌビア人 (Nūbī) の解放奴隸 (mawlā) で、ダビデ (Dāwud) 王の治世10年に生まれ、'Ayla と Madyan の地 (共にアラビア半島北西端) に住んでいた人物



となっている (§105)。また、第53章には、後述するアード(‘Ād)族に属し、Saba’(在アラビア半島南部)にある Ma’rib のダムを造り (§1251)、禿鷲の何倍もの寿命を持った (§1260)、ルクマーンという王がいたとある。B.HellerとN.A.Stillmanによると、ジャーヒリーヤ時代のアラブ人の間では、アードの子ルクマーンなる者がその知恵と長寿(長生きの象徴たる禿鷲の7倍の寿命を維持した)で知られていたが、クルアーン以後は、ルクマーンなる者が諺の作り手として有名になり、中世後期になると、寓話作者とみなされるようになった(“Lukmān”, *EI*②, V, pp.811~13)。

- 8) 引用部はクルアーン16:15, 31:10。
- 9) “(そして、)地(lit.それ)の木々”(wa-shajara-hā)が、‘Abd al-Hamīd版では、“そして、それ(ら)を役立たせた(wa-sakhhara-hā)”で、“…地に住む者の食糧を創り、それ(＝食糧or地)と地に必要な物とを役立たせ給うた”という意味になる。
- 10) 引用部はクルアーン41:9~11。
- 11) 次文と共に、同41:12参照。その他、同2:29, 17:44, 23:86, 65:12, 67:3, 71:15参照。
- 12) 引用部は同41:12。
- 13) 同24:43[雹を含む山(なす雲)]参照。
- 14) 同2:30, 13:13, 39:75の他、7:206, 21:20, 37:166, 40:7などを参照。“栄光に満ちた、玉座の主”は同85:15、“アッラーのはかに神はない”は同37:35, 47:19。
- 15) ‘Abd al-Hamīd版では、“人間(の)”がない。アブラムについては不明。
- 16) ジンは、クルアーン第72章の名で、クルアーンによれば、下記のように火から創られ(15:27,55:15)、死ぬ存在(46:18)で、イスラームの信仰を受け入れた良いジンも、拒否して敵対する悪いジンもいる(72:1~15)。イスラーム以前からアラブの間で知られていた霊的な存在で、変幻自在にその姿を人間、動物その他に変えることが出来ると考えられ、人間のように男女の別があり、飲食をし繁殖すると言われる。また、人間よりも2000年前に造られたとも言われる。
- 17) “煙のない火から”は、クルアーン55:15。また、イブリースは、クルアーンによれば、もともとジンの仲間(7:12, 18:50, 38:76)で、アダムに跪拝せよというアッラーの命令に背いた罪で天上から追放され、復活の日まで人間を誘惑する(7:11~18, 15:31~40, 17:61~64, 38:74~83)が、サタンの個人名とも考えられる(2:34~36, 7:11~22, 17:61~64, 20, 20:116~20)。この語はギリシア語の Diabolos から来ているのではないと言われる(A.J.Wensinck, “Ibīs”, *EI*②, III, p.668)が、アラビア語世界では b.l.s. を語根と考えて、ablasa(「誰かを絶望させる、誰かの希望を取り去る」意)と結び付ける傾向がある(Ṭabarī, I, pp.93, 151参照)。なお、Ibn Qutayba (p.14)には Wahb b. Munabbih <前稿III p.297参照>が述べたとして、ジンたちがアダムより前に地上に住んでいたが、その一派がアッラーを信仰せず、血を流したので、アッラーの命により、イブリースを長とする天使軍が地上に降り、そのジンたちを辺境や島々に追いやって、自分たちが地上に住んだという記事がある。
- 18) 引用部はクルアーン2:30。
- 19) “何者(lit.誰)”、‘Abd al-Hamīd版では、“何”。
- 20) 引用部はクルアーン2:30。
- 21) 以下、“様々な色をして現れ出ることになった(lit.現れ出た)”までが、Ṭabarī (I, pp.87~88)では、イブン・アッパースと、イブン・マスウード(本『黄金の牧場』の著者マスウーディーの祖先に当たるとされる Ibn Mas‘ūd)他に帰せられている。ガブリエルは、クルアーンでは、2:97~98, 66:4にその名が登場し、イスラームでは、アッラーの使者としてその教えを預言者に伝える。
- 22) ミカエルは、クルアーンでは、2:98に登場するが、イスラームでは、万物の秩序と生命を監視する。
- 23) 死の天使は、クルアーン32:11に現れるが、‘Izrā’īlと思われる。
- 24) この説は、Ṭabarī (I, p.88)では、イブン・アッパースや Sa‘īd b. Jubayr に帰せられている。
- 25) “masnūn な粘土から”は、クルアーン15:26, 28, 33。この masnūn の意味も、Ṭabarī (I, pp.87, 88)では、イブン・アッパースなどに帰せられている。
- 26) Ṭabarī (I, pp.89~91)では、イブン・アッパースや、イブン・マスウード他により、40夜、或は40年と

なっている。“陶器のような ṣalṣāl から” は、クルアーン55:14。

- 27) 引用部はクルアーン76: 1。
- 28) 以下、この節 (§ 39) の終わりまで、同様な説が、Ṭabarī (I, pp.90~91) では、イブン・アッパースや、イブン・マスウード他に帰せられている。
- 29) クルアーン15:28~31, 38:71~74と、本書 § 45参照。引用部は共にクルアーン2:34。因に、6世紀頃、キリスト教徒 Ephraem Syrus が著したとされるシリア語の作品 *Me'ārath Gazzē* 『宝の洞窟』 — Houtsma によれば、al-Ya'qūbī がその *Ta'rīkh* の最初の記事 (アダムに始まる聖書の族長達の記事) に利用している (Ya'qūbī, pp.viii~ix) — には、アッラーがアダムに万物の支配力を与え、天使たちは彼を崇めたが、妬み心を持つ悪魔だけは彼を崇めず、天国から追い出されたとある (ed.C.Bezold, *Die Schatzhöhle*, I, Leipzig, 1883, 14f.)。
- 30) 引用部はクルアーン7:12, 38:76。
- 31) 引用部は同38:77~78だが、同15:34~35も参照。
- 32) 引用部は同7:14, 15:36, 38:79。
- 33) 引用部は同15:38, 38:81。
- 34) “降りて来る” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“入る”。
- 35) 引用部は同17:11だが、同21:37も参照。そして“創造された” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“あった”。また、アッラーがこう言った理由は、Ṭabarī (I, p.92) では、イブン・アッパースとイブン・マスウード他に帰せられる話として、霊がアダムの両目に入った時、彼は楽園の果実を見、霊が彼のおなかに入ると、食べ物がはしくなり、霊が足に達しないうちに跳び上がって、急いで楽園の果実を手に入れようとしたからだ、また、他の経路によるイブン・アッパースからの話として、吹き込まれた霊がアダムの臍に達した時、彼は自分の肉体を眺めて、その美しさに喜び、立ち上がろうとしたが、できなかったからだ、と説明されている。更に、Ṭabarī (I, pp.115~16) では、アダムが被造物の最後に創造されたからだとなっている。
- 36) “入り過ぎた” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“次々と着いた”。
- 37) 引用部はクルアーン27:59, 29:63, 31:25。そして“お前の主” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“アッラー” となっているが、この「アッラー (orお前の主) はお前に御慈悲を垂れ給うだろう」という表現は、この場合、くしゃみをした者に向かって言われる。因に、Ṭabarī (I, p.92) には、まず、イブン・アッパースとイブン・マスウード他からの話として、アッラーが霊をアダムの中に吹き込み、霊がアダムの頭に入った時、アダムはくしゃみをした、そこで天使達は「言いなさい、アッラーに讃えあれ」と言い、アダムはそう言った、するとアッラーはアダムに「お前の主はお前に御慈悲を垂れ給うだろう」と言い給うた、という記述が、次に、他の経路によるイブン・アッパースからの話として、吹き込まれた霊が完全にアダムの肉体に行き渡った時、彼はくしゃみをして、アッラーのインスピレーションによって「アッラーに讃えあれ、万有の主」と言った、するとアッラーは「アダムよ、アッラーがお前に御慈悲を垂れ給うだろう」と言い給うた、という記述が挙がっている。その他、類似の記述も Ṭabarī (I, pp.93, 94, 156) にある。
- 38) “流す” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“用意する、予め定める”。
- 39) “隠されていない” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“疑わしくない”。“不可知でない” が、“不可能でない”。
- 40) イマーム (imām) とは、一般にムスリム (イスラーム教徒) 集団の指導者の意味だが、以下の記述から、シーア派の採用する、最高指導者の意味と思われる。
- 41) “'awālim (万界、諸世界)” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“'awāmil (諸因子)”、即ち、lとmが入れ代わっている。
- 42) “彼が天使達 (lit.彼ら) に知らせる” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“かれ (=アッラー) が彼に知らせ給う” ともとれる。
- 43) “我々の光の預かり手として称讃されること” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“かれが彼に示した我々の光の預かり手?”。
- 44) “清い流路 (ṭāhir al-qanawāt)” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“表に見える空白の期間 (zāhir al-fatarāt)”。
- 45) “人間 (adh-dhar’)” が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“原子? (adh-dharr)”。

- 46) “我々の最も高貴な者達 (‘azā’ iz-nā)” が、‘Abd al-Hamīd版では、“我々の本性 (gharā’ iz-nā)”。
- 47) “存在物 (al-mawjūdīn)” が、‘Abd al-Hamīd版では、“アッラーの唯一性を告白する者達 (al-muwahhidīn)”。
- 48) 彼らはいずれもシーア派のイマームで、前述のアリー (§ 43, 預言者ムハンマドのいとこ) が初代、アル＝フサイン以下は、順に第3～6代。それぞれ親子関係にある。第6代アブー・アブド・アッラーフ・ジャアファル、即ち Ja‘far aṣ-Ṣādiq は148/765年没。
- 49) 創世記 1:1～31参照。
- 50) Ṭabarī (I, pp.40～44) によると、イスラーム教徒の間では、創造は日曜日に始まったとする説と、土曜日とする説とがあり、タバリー自身は日曜説をとっている。そしてṬabarī (I, pp.115～18) には、アダムが金曜日に創造されたとする諸説も見られる。
- 51) 創世記 2:22参照。Ṭabarī (I, pp.101～02) には、イブン・アッバースやイブン・マスウードほかによる説として、一人の女性がアダムの肋骨から造られ、“生きている” (ḥayy) ものから造られたので、Hawwā’ とアダムは呼んだということが記されている。創世記 3:20参照。但し、クルアーンにはエバの名前は出ず、単にアダム (アダム) の配偶者 (zawj) とある (2:35, 7:19, 20:117, 39:6)。
- 52) Ṭabarī (I, p.116～17) によれば、アッラーはアダムと彼の妻を金曜日の2時間後にパラダイスに住ませ、その日の7時間後に地上に落としたので、両者の楽園滞在は5時間であったとか、金曜日の3時間後にパラダイスに住ませ、楽園滞在は3時間であったとか、アダムは楽園から9時か10時に追い出されたというような諸説がある。
- 53) 天地創造の各1日はこの世の1000年に当たると考えられる (旧約聖書 誌篇90:4 や、Ṭabarī, I, pp.54～58, 117～19参照)。
- 54) ジェッダは、アラビア半島西部、メッカの外港で、民間語源では“祖母” (jadda)、即ち人類の祖母エバと関係づけられ、当地にはエバの墓があるとされる。次に、バイサーンは、パレスティナ、ティベリアス湖の南30キロ、ヨルダン溪谷にあり、古代エジプトによる占領時代以来、特に戦略的根拠点として栄えた町 (ギリシア語名 Scythopolis) である。暑くて湿度が高いことで悪評を得ているが、楽園の4泉の1つという伝説を持つ ‘Ayn al-Fulūs がある。また、Ṭabarī (I, p.121) には、他人の説として、この一節と同様な記述が見られるが、バイサーンだけは、Maysān、即ちイラク南部、現在のティグリスとユーフラテスとの合流点付近の地域となっている。この地域も暑くて湿度が高いことで悪名高く、この両河の合流点付近にも楽園伝説がある。なお、イブリースは蛇の口や腹に隠れて楽園に入り込み、アダムや彼の配偶者を誘惑したとされる (Ṭabarī, I, pp.104～07参照)。
- 55) ルフーン山は、スリランカ南西部にある標高2231mの通称アダム峰、Samanala 山のこと。‘Abd al-Hamīd版では、ar-Rāhūn。なお、上記の Ṭabarī (I, p.121) の他人の説では、Būdh (Nūdh) 山。
- 56) ‘Abd al-Hamīd版では、“これらの葉” が“それ (orそのこと)” になり、次文の“また、それ以外の説もある” が欠けている。
- 57) “かの山では銅玉、金剛石が輝き” が、‘Abd al-Hamīd版では、“その山では銅玉が輝き、それ (=その山) は金剛石から成っていた”。
- 58) “一塊 (ṣubra)” が、‘Abd al-Hamīd版では、“一集まり (ṣarra)”。
- 59) 以下、この節 (§ 48) の終わりまで、Ṭabarī (I, p.127) にも、同様な記述が、そのソースが示されずに挙がっているが、“桜桃” の代わりに “shāh(u)lūj(「桃の王」の意?、或はプラムの一種か)”、“大胡瓜” の代わりに “いなご豆 (khurnūb)” となっている。
- 60) “桜桃” が、‘Abd al-Hamīd版では、“shāh(u)lūj”。
- 61) “メロン” が、‘Abd al-Hamīd版では、“いなご豆 (kharrūb)”。
- 62) アラファートは、メッカの東北21キロほどにある丘。ハッジ (hajj, 大巡礼) の際、この丘に駆け登る (クルアーン 2:198参照) 。‘Abd al-Hamīd版では、‘Arafat。
- 63) 創世記には、カインだけで、レブダの記述はない (4:1) が、後者は前記のシリア語作品『宝の洞窟』に、Labudaとして登場している (op.cit <注30> p, 34)。以下にアベルの姉妹として登場するクリーマ Aqlīma と共に、この双子の男女の話はミドラシュ (古代ユダヤの聖書注解書) の著者たちの産物であるとされる

(N.Stillman, "The Story of Cain and Abel in the Qur'an and the Muslim Commentators: Some Observations", *Journal of Semitic Studies*, XIX, 2, 1974, p.234)。なお、このレバダは、'Abd al-Ḥamīd 版では、Luwaydhā' となっている。また、Ṭabarī (I, p.146) では、Ibn Ishāq <前稿III p.297 参照> により、アベルの双子たる姉妹として Labūdhā' という名が挙がっており、F.Rosenthal は、この部分はタバリーが Ibn Ishāq の *al-Mubtada'* を引用したのだと言う (*The History of al-Ṭabarī*, vol. I, New York, 1989, p.317)。そして、『宝の洞窟』を利用したとされる Ya'qūbī (I, p.4) 一因にこの書はシーア派から見た歴史 — では、Lūbadhā, 男の子はカイン (Qābīl) となっている。更に、Ibn Qutayba (p.17) でも、カイン (Qābīl) とアベルの各々に双子の女の子がいることが、Wahb b.Munabbih の言として記されている。

- 64) 同様に、創世記では、アベルしか (4:2) 挙がっていないが、上記の『宝の洞窟』 (ibid.) には、Qalimath として登場し、Ya'qūbī (I, p.4) では、Iqlīmā. そして、Ṭabarī (I, p.144) では、一部の説として、カイン (Qābīl) の双子たる姉妹 Qalīmā となっており、アベルの姉妹はその名が挙がっていない。
- 65) アリー・ブン・アル＝ジャフムは、一時、アッバース朝カリフ al-Mutawakkil の宮中に入りしバグダードの詩人で、反ムウタジラ、反シーアの立場に立つ。249/863年没。以下のカスィーダの一節は、今に伝わる彼のディーワーン (diwān, 詩集) の抜粋中に見られるもの (ed. Khalīl Mardam Beg, Damascus, 1949, p.159) と一部異なる。
- 66) イスラーム教徒の間によく流布している話では、カインの姉妹はアベルの姉妹より美人であったので、カインは自分の姉妹との結婚を望み、父アダムが欲するアベルと彼女との結婚に異を唱えた。そこで兄弟2人はどちらが彼女に相応しいかを決めるためにアッラーに供物を捧げて、アッラーの意志を問うた。その顛末がカインのアベル殺害であった。Ṭabarī, I, pp.137～41参照。
- 67) 『時代の情報…』は、マスウーディーの主著で、30巻に及ぶ歴史書。前稿III pp.288～89参照。
- 68) 以下、創世記4:3～8参照。
- 69) クルアーン5:27～31参照。
- 70) 引用部は同5:31。
- 71) “…言って彼のことを嘆く”が、'Abd al-Ḥamīd 版では欠けている。
- 72) Ṭabarī (I, p.146) には、このアダムの詩の最初の4半句がアリーからの話として挙がっている。F.Rosenthalによれば、このアダムの詩は、アラビアの有史以前を扱っている極めて想像的な初期イスラーム文学にその源泉を持っていたと思われ、かなり広まった詩である (*Sweeter than hope*, Leiden, 1983, p29, n.121)。例えば、Ibn Hishām (d.218/813) の *at-Tijān fī Mulūk Himyar wa'l-Yaman* (ed.F.Krenkow, Hyderabad Dekkan, A.H.1347, p.17)、al-Hamadānī (d.334/945) の *al-Iklīl min Akhbār al-Yaman wa-Ansāb Himyar* (I, ed.O.Löfgren, Uppsala, 1954, pp.12～13)、ath-Tha'labī (d.427/1035) の *Qīṣaṣ al-Anbiyā'* (Caero, p.45f.)、Ibn Ḥajar al-'Asqalānī (d.852/1449) の *Lisān al-Mīzān* (I, Hyderabad Dekkan, A.H.1329, p.298) などにも見られる。
- 73) “最も力強いお方”が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“最も慈悲深いお方”。
- 74) “別の写本の中に、この詩で我らが既に述べたものではない、独立したもう一つの詩句を見付けた。それは、アダムには声は聞こえたが姿は見えないまま、次のように言うものである”が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“アダムには声は聞こえたが姿は見えないまま、そいつは、先に述べたこの詩にはない独立した別の詩句を詠う。それは次のような詩句である”。
- 75) Ṭabarī (I, p.146) には、この部分もアリーに基づく話として挙がっている。その他、*al-Iklīl* (op. cit <注72> I, p.13)、*Lisān al-Mīzān* (op.cit <注72> I, p.299) なども参照。
- 76) “輝かせよう (unīru)”が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“蘇生させよう (anshuru)”。
- 77) “我が名を唱えよ (sammi)”が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“すぐに励め (shammir)”。
- 78) 創世記4:25参照。
- 79) 創世記5:5参照。前文からここまでは、Ya'qūbī (I, p.5) にもある。また、Ibn Qutayba (p.19) によれば、Wahb b.Munabbih はアダムが1000歳生きた [但し、Ibn Qutayba 自身はトーラーに従い、930年]

とする。更に、Ṭabarī (I, pp.156～60) には、960年、936年、930年説などが挙げられている。

- 80) “セトがアダムの子供達の後見人となった”が、‘Abd al-Ḥamīd 版では、“彼（＝アダム）は息子のセトを自分の子供達の後見人としていた。”
- 81) Ṭabarī (I, p.170) には、イブン・アッパースに帰する説として、同じ数値が挙げられている。
- 82) ミナーは、メッカの東北東12キロにあり、ハッジの際、ここで石投げが行われる。アブー・クバイス山は、メッカの東端にあり、ある伝説では、この山に『宝の洞窟』(Maghārat al-kanz) という、人類の最初の者達が住み、死後、一時的に葬られた場所があった (“Abū Kubais”, EI①, p.97)。Ṭabarī (I, p.163) にも、Ibn Ishāq 以外の者が言ったとして、アブー・クバイス説が、また Ibn Qutayba (p.19) にも、Wahb b. Munabbih の言として、アブー・クバイス山の宝の洞窟 (Ghār al-kanz) 説が挙げられている。
- 83) 聖なる文書は、クルアーンの20:133や、アブラハムとモーセに下されたものとして53:36f., 87:18f. に登場するが、一般には、アダム、セト、エノク（イドリース）、アブラハムの4名に与えられたとされる〔モーセには律法、ダビデには詩篇、イエスには福音書、ムハンマドにはクルアーンという4聖典が下されていることは言うまでもない〕。詳しくは、本『黄金の牧場』§62を見よ。
- 84) セトの妻は、Ṭabarī (I, p.164) には、Ibn Ishāq によるとして、アダムの娘で、セトの姉妹たる Hazūra という名が挙げられている。
- 85) “移った (sāḥa)” が、‘Abd al-Ḥamīd 版では、“輝いた (lāḥa)”。
- 86) ムウタジラ派は、合理的な思惟に基づき、アッラーの属性を否定し、「創造されたクルアーン」説をとり、外部から“退いた者達”と呼ばれた神学派。ハワーリジュ派は、アリーのもとから“出て行った者達”で、敬虔なイスラーム教徒ならば誰でもカリフになり得ると主張する過激派。ムルジャ派は、神学派の一つで、人間の信・不信について、その判断をアッラーによる最後の審判まで“延期する者達”。ハディースの徒は、「預言者のハディース」を一字一句を厳密に外面的に解釈する者達。ザイド派は、アリーの曾孫ザイド (Zayd) の名に由来するシーア派の一つで、シーア派主流が篡奪者たちとして非難するアリーより前の3人のカリフを「劣ったイマーム」として認める。
- 87) 創世記5:8参照。Ya‘qūbī (I, p.5) によれば、その日は8月27日、火曜となる。
- 88) Ya‘qūbī (I, p.6) によれば、盲目のレメク (Lamak) なる者に石を投げつけられ、頭を打ち砕かれて死んだ。次文にある『中間の書』は、マスウーディーの歴史書で、規模的に大著『時代の情報』と本書『黄金の牧場』との中間に来る。前稿IIIp.289参照。
- 89) 創世記5:11では905歳。Ya‘qūbī (I, p.6) は、同じ日だが、965歳とする。
- 90) 創世記5:14では910歳。Ya‘qūbī (I, p.6) も920歳で、月日の言及はない。
- 91) マハラルエルの生涯は、創世記5:17では895歳。Ya‘qūbī (I, p.7) によれば、マハラルエルは4月2日、日曜、895歳で没した。そして、‘Abd al-Ḥamīd 版では、イエレドの代わりに、ルド (Lūd) となっており、以下、同版ではイエレドは全てルドとなる。
- 92) ‘Abd al-Ḥamīd 版では、カインに“彼の兄弟の殺害者”が付いている。カインの子供達とは、恐らくカインから7代目のユバル (創世記4:21) のことと思われる。Ṭabarī (I, p.168) にも、Ibn Ishāq 以外の者が述べたとして、カインの子孫で楽器を発明したのはYūbāl? で、彼はマハラルエルの時代に笛をはかを発明したとある。
- 93) 恐らく、Ṭabarī (I, pp.168～70) や Ya‘qūbī (I, pp.7～8) の記述から見て、音楽などにうち興じるカインの子孫達のこと、山に住むセトの子供達に伝わり、後者の男達100名が、前者と交わるなという祖先伝来の戒めを破り、イエレドの説得にも耳を貸さず、山を降りて女達と睦み、快楽に耽るようになった。“イエレド”が、‘Abd al-Ḥamīd 版では、“ルドの子供達”。
- 94) “分立 (at-tahazzub)” が、‘Abd al-Ḥamīd 版では、“相互抗争 (at-taḥārūb)”。
- 95) “この種族の地は…地方で”が、‘Abd al-Ḥamīd 版では、“この種族の大部分は…地方におり”。クメール地方とは、インドシナ半島のメコン川流域にあったクメール人の国、今のカンボジア地方か。
- 96) 創世記5:20参照。Ya‘qūbī (I, p.8) では、その日は3月1日、金曜となる。‘Abd al-Ḥamīd 版では、“962年”が“732年”。
- 97) イドリースはクルアーン19:56～57, 21:85に登場する。Nöldeke や R.Hartmann に拠れば、アレクサンダー

- の料理人で、不死を獲得した Andreas が原型で、同じく不死を得たエノクと同一視されるようになったのではなからうか (A.J.Wensinck, "Idris", *ET*②, III, p.949)。
- 98) サービア教徒は、Harrân (現トルコ南東部 Urfa の南) が本拠の、星辰崇拝をする古代宗教の一派か、或は、ユーフラテス川口の沼沢地に住み、水中全身洗礼を特色とするマンダ教徒を指すともされる。
- 99) “高い地位に” は、クルアーン19:57。
- 100) 創世記 5:23では365年。Iby Qutayba (p.21) による Wahb b. Munabbih もイドリースを365年生きたとするのに対し、Ya'qūbī (I, p.9) はエノクはイドリースで、300年生きたとする。
- 101) 同様な内容が、Ṭabarī (I, p.173) にはトラーの人人の誰かの言として、Ibn Qutayba (pp.20~21) には Wahb b. Munabbih の言として載っている他、エノクは筆で書いた最初の者 (Ṭabarī, I, pp.172, 174; Ya'qūbī, I, pp.8~9; Ibn Qutayba, p.21) とも言われる。
- 102) ブルガール人は、マスウーディーによれば、トルコ系で、その都は Māyūtīs 海 (アゾフ海) 岸にあり、ホラズム (Khuwārazm) との間を隊商が結び、332/943年当時、王はイスラーム教徒 (310/922年に入信) であった (§455)。また、この王は約5万以上の騎兵で、コンスタンチノブル (al-Qusṭanṭīniya) の地を襲っている (§456)。他の同時代資料 (Ibn Faḍlān の『(ボルガ・ブルガール旅行) 記』Risāla など) を総合すると、ブルガール人とは、トルコ系で、ボルガ川中流域に住んでいた、一般にボルガ・ブルガール人と呼ばれる民 [これに対して、現ブルガリアは、彼らの兄弟民族で、ダニユープ川を越えた、いわばダニユープ・ブルガール人と称される者達の国] を指す。次のルース人は、マスウーディーによれば、権力にも聖法にも従わない無明の民で、Buntūs 海 (黒海) を独占し、銀山の地を持ち、大商人はブルガール人の王都を度々訪れる (§455)。また、ルース人は al-Khazar 海 (カスピ海) 諸沿岸を荒らし回り、バクー (Bākuh) に至り、Shirwān 国のイスラーム教徒達を撃ち破ったが、最終的には3日に及ぶ al-Khazar 川 (ボルガ川) の戦いでイスラーム教徒軍に敗れ、約3万が戦死し、約5千名が敗走した (§460~61)。その他、マスウーディーは、300/912~13年より前、al-Andalus (イベリア半島) を船で襲った何千という al-Majūs (ノルマン人) をルース人と思うとも言っている (§404)。一般に、ルース人 (ルーシー) は、9世紀にドニエプル川流域のスラブ人に対する支配権を確立したヴェリャーク・ノルマン人の集団を指すことが多い。3番目のスラブ人については、マスウーディーが他の箇所 (§905, 910) では、ヤフェトから出たとしている。そして、その居住地は北方で、西に広がり、諸種族に分かれ、王を持ち、戦い合い、ヤコブ派 (al-Ya'qūbiya) キリスト教徒もいれば、聖典も聖法もない者達もいるが、Walītābā (オーデル川の西に住むヴェレティア人) が最も由緒ある種族であるとする (§905)。マスウーディーは更にスラブ人の中に、Nāmjin (ドイツ人)、Sarbin (セルビア人)、Murāwa (モラビア人)、Khurwātīn (クロアチア人)、Sāshīn (ザクセン人) などを挙げている (§906)。このように結局、スラブ (Saḡāliba は、ビザンツの文献に登場する Sklave, Sklavene の転写と言われる) とは、少なくともマスウーディーの当時9~10世紀頃は、Ibn Faḍlān の旅行記なども考慮すると、中東欧地域に住む諸民族の総称として用いられているようだ。
- 103) 創世記 5:27では969年。Ya'qūbī (I, p.9) によれば、9月21日、木曜、960年となる。
- 104) 一般に、レメクの家族以外は、レメクの訓戒に耳を貸さず、すべて山を降りて、カインの子孫達のところへと行ってしまったとされる (Ṭabarī, I, p.178; Ya'qūbī, I, p.9)。
- 105) 創世記 5:31参照。Ya'qūbī (I, p.10) では、その日は3月17日、日曜とある。なお、'Abd al-Hamīd 版では、“790年” となっている。
- 106) 創世記 6:11~12参照。ノアは、クルアーンでは、預言者 (4:163, 33:7)、使徒 (7:61, 9:70, 14:9, 26:107, 40:5, 50:14)、明白な警告者 (11:25, 26:115, 71:2) として登場し、第71章の名ともなっている [章全体がノアの言という形をとる]。
- 107) クルアーン 7:59~64, 10:71~73, 11:25~34, 23:23~26, 26:106~118, 71:1~24参照。
- 108) 創世記 6:13~14並びにクルアーン11:37, 23:27参照。
- 109) Ibn Qutayba (p.19) には、Wahb b. Munabbih の言として、ノアがアダム [の遺体] を取り出し、それを船の中の柩に置き、洪水の後、元の場所に戻したとあり、Ṭabarī (I, p.163) にも同様な記述がある。また、Ṭabarī (I, p.192) には、イブン・アッパースに遡る話として、ノアはアダムの遺体を乗せ、それを女と男

の仕切りとしたとある。

- 110) 創世記 7:10～11によると、ノアの生涯の第600年、第2月17日に洪水が起こっており、彼の乗船は、第2月10日となる。ノアが箱船に入ったのは、洪水が起こる7日前、即ち彼の600歳の第2月10日となる。Ya'qūbī (I, pp.11, 12) では、3月17日、金曜となる。また、Ṭabarī (I, p.191) には、ノアの600歳のその月の17日という記述もある。これらは、洪水の日との混同が考えられる[17日としているのは、この日に洪水が始まったからであろう]。そして、Ṭabarī (I, pp.192, 197～98) にはアッラーの使徒イブン・アッパースなどに遡る話として、またIbn Qutayba (p.23) にはWahb b. Munabbihの言として、ノアの乗船はRajab月(イスラーム暦9月)の10日で、下船は6か月後、al-Muḥarram月(イスラーム暦1月)の'Ashūrāの日(10日)という記述が見られるが、これがイスラーム教徒の間ではよく言われている説である。
- 111) 創世記 7:24では150日。'Abd al-Ḥamīd 版では、“地の全てが5か月にわたって沈められた”。
- 112) 前半は創世記 8:2～3 参照。“水を減らす”が'Abd al-Ḥamīd 版では、“水を飲み込む”となり、分かりやすい。後半は創世記 8:4 によると、船はアララト山の上に止まったとなる。ジューディーはクルアーン 11:44にも記されているが、現トルコ領内にあり、イラクとの西部国境に近い標高2089mのÇudi山。
- 113) パースーリーンは、[中世の]モスル(al-Mawṣil)地方の一つで、ティグリス川の東にあると言われた(Yāqūt, I, p.322)。また、ジャズィーラ・イブン・ウマルは、現トルコ領、シリアとの東の国境の町Cizre。パラサングは長さの単位で、一般に1パラサング＝3アラビア・マイル(1アラビア・マイル＝6474フィート)。
- 114) 創世記 8:18と異なり、マスウーディーはノアの家族に40名の男と40名の女を加えているが、これは、Ibn Qutayba (p.23) にあるWahb b. Munabbihの説を採用しているようだ。しかし、結局は以下にある通り、この80名の子孫は絶え、人類はノアの3名の息子から出ることになり、創世記 9:19に対応する。また、創世記と異なり、ノアの妻に言及されていないが、これは、クルアーン66:10に彼女がノアを裏切ったとあるためであろう。なお、Ṭabarī (I, pp.194～96) には、箱船に乗ったのは、ノアの家族を含めて80名とか、8名とかいった諸説も挙がっている。
- 115) サマーニーンは、文字どおりは“80” — ノアと共に箱船で助かった人の数 — を意味し、Sūq Thamānīn とも呼ばれ、現トルコ領で、上述のÇudi 山麓 Betmanin (北緯37°19' 東経42°33')。次文の332年は西暦943～4年。但し、Ṭabarī (I, p.213) は、イブン・アッパースに基づき、Sūq Thamānīnがノアの子供達にとって余りに狭くなりすぎた時、彼らはバビロン(Bābil)に移り、その町を建設したという話も記す。
- 116) 引用部はクルアーン37:77。
- 117) 引用部は同11:42で、ヤームはその名はクルアーンにないが、洪水で滅ぼされた罪深い息子で、聖書のカナン Kana'anに当たるとされる。Ṭabarī, I, p.199参照。
- 118) ハムの起こした一件については、創世記 9:22参照。次の呪いの言葉は、同9:25では、ハムではなくカナンに投げかけられる。ところが、Ibn Qutayba (p.25) にも、トーラーのこの部分の訳として、「呪われよ、カナンの父」(創世記 9:22の訳“カナンの父ハム” 同9:26～27の訳“カナンの父”)がある。また、次文の祝福の言葉は創世記 9:26～27参照。
- 119) 次文の950年と共に、同9:28～29参照。クルアーン29:14では、単に1000年引く50年とある。Ya'qūbī (I, p.14) は、ノアの死を5月の水曜日としている。Ibn Qutayba (p.24) には、Wahb b. Munabbih による1000年説も挙がっている。
- 120) “彼の子供達も従った”が、'Abd al-Ḥamīd 版では、“彼の子供達を従わせた”。
- 121) 以下、“サーリフをお遣わしになった”までは、Ibn Qutayba (pp.26～27) を利用していると思われる。聖なる地とはメッカとメディナのことで、次のハドラマウトはアラビア半島南部、現イエメンの東部地域である。また、アーリジュはFaydとal-Qurayyātとの間にある砂地と言われ(Yāqūt, IV, p.70)、アラビア半島北部の大ネフド(an-Nafūd) 砂漠の少なくとも南部に当たるとと思われる。
- 122) アラムとアルバクシャドは創世記10:22、ウツは同10:23参照。旧約聖書にはないアードの民は、クルアーンでは、身体が大きく(7:69)、建築に長け(26:128～29, 89:7)、下記のアハカーフに住んでいた(46:21)。高慢になり(41:15)、同胞の預言者フードの警告にもかかわらず、邪神を崇めたので雨が降らなくなった(11:50～52)。それでも改心せず、結局は、フードと彼に従う者を除き(7:71～72, 11:53～58)、烈風に

よって滅ばされた (41:16, 51:41, 54:19, 69:6)。マスウーディーの本書37章によれば、第1アード族はノアの後、最初のアラブ人王国を建てたことが、アッラーの御言“かれ (=アッラー) は第1アードを滅ぼし給うた” (53:50) からわかる (§923)。彼らは身の丈が棗椰子の木ほどもあり、寿命もその身長に相応しく長く、気も強く荒く、彼らよりスケールの大きな民は地上にいなかった (§924)。始祖アードは逞しい力強い人物で、月を崇拜し、伝えられるところでは、4000名の子をもうけ、1000名の女性と結婚したという。その領地はイエメンに隣接しており、オマーンからハド라마ウトに及ぶ地域、つまり Ṣuhār 地方とアハカーフ地方であった。アラブの歴史の伝承者達によると、アードは夥しい子孫に囲まれ、10世の子孫まで見とどけ、人民をよくいたわり、客を厚くもてなし、1200歳の一生を終えた (§925)。その後は長子の Shadīd が580年間君臨し、次いで Shadīd の弟 Shaddād が900年間君臨したが、彼は世界の全ての王国に支配を及ぼしたと言われ、Iram dhāt al-‘imād (円柱のイラム) の都を建てた人物で (§926)、世界を見て廻り、多くの合戦を行なった (§927)。また、47章では、アード族は al-Khuljān b. al-Wahm が王の時、地上で悪行をなし、Samūdā, Sadā, al-Habā という三つの偶像を崇拜したので、アッラーは彼らにフードを遣わした。ところが、彼らはフードを嘘つき呼ばわりしたので、彼は天罰が下るよう祈ったところ、3年間、雨が降らず、大地は乾き果て、駱駝は乳を出さなくなった (§1170)。そこで彼らは代表をメッカに遣り、雨乞いをさせることになったが、一行はメッカに入ると、飲んだり騒いだりしたので、2名の歌姫が詩をもって諫めるに至った (§1172)。ようやく彼らも我に帰り、急いで雨乞いをしたところ、雲が現れ、彼らは好ましい雲を選んだ (§1173)。アッラーはアード族に荒廃の風を送ったが、この風が谷間から襲いかかった時、彼らは“これは雨を降らす雲だ” (クルアーン46:24) と言って喜んだ。しかしフードは“いやいや、これこそお前達が性急に求めているものだ。厳罰を運ぶ嵐であるぞ” (クルアーン46:24) と戒めた。嵐は水曜日に吹き始めたが、次の水曜日が来た時は、アード族の[不信]者は一人として生き残っていなかった (§1174)。フードは彼らの滅びた様を見とどけると、彼に従う信者と共に立ち去った (§1175)。前嶋信次氏は、これらの部分を訳出され、37章は前期アード族、47章は後期アード族と解すべきではないかとの説を提唱される(『古代アラビアの二民族—アードとサムード—』『アラビア研究論叢—民族と文化—』日本サウディアラビア協会・日本クウェイト協会、1976, pp. 7~15)。Ṭabarī (p.231) も、アラムの子ウツの子アードは第1アードだとする。なお、Ya‘qūbī (I, p.19) は、アラムの子ウツの子アードを下記 (§75) のナホルの時代に置き、その居所をハド라마ウトと Najrān (現サウジ・アラビア南西国境付近にある町) の間とする。

- 123) アハカーフは、クルアーン第46章の名で、第21節に、アードの同胞の一人(フード)が当地でその民に警告したとある。アラビア半島南部、オマーンとハド라마ウトとの間にある砂地と考えられる (Yāqūt, I, p.115)。フードは、クルアーン第11章の名となっており、上記の通り、アードの民の預言者で、クルアーンに登場するアラブの預言者5名の最初である (7:65~72, 11:50~60, 26:123~40, 46:21)。マスウーディーによれば、アードの子 al-Khulūd の子 Khālīd の子 Rabāh の子 ‘Abd Allāh の子 (§1170) で、下記のサーリフとは約100年の差がある (§931)。他のアラブ諸伝承では、フードはシェラの子エベル、或はそのエベルの子であるとか、アードの滅亡後は信者と共に ash-Shihr (現イエメン南東部の港町)、或はメッカに移り、150年生きたとか、墓がハド라마ウト、或はメッカ、或はダマスカスにあるとも言われている。
- 124) ゲテルは、創世記10:23参照。但し、‘Abd al-Hamīd 版だけでなく、Pellat の利用した諸写本でも、それゆえ、*Prairies d’Or* (前稿Ip.280) でも、“ゲテル”が“エベル (‘Ābar)”となっており、これは § 929, 930においても同様である。マスウーディーの元と思われる Ibn Qutayba (p.27) では、アラムの子らには、エベルの子サムードがいるが、彼はアラムの子ゲテル (Jāthar) の子サムードとも言われるとある。また、Ṭabarī (I, pp.244, 219) では、サムードはアラムの子ゲテル (Jāthar、或はエベル) の子、Ya‘qūbī (I, p.20) では、サムードがアラムの子サムードの子 Jāzar の子となっている。サムードは旧約聖書にないが、このサムードの民もクルアーンに頻繁に登場する。アードの民の後継者で、平野に高樓を建て、谷間の岩を穿て家とした (7:74, 89:9) が、アッラーを忘れ、預言者サーリフを嘘つき呼ばわりし、彼の忠告に逆らって、アッラーの雌駱駝を屠った結果、サーリフと彼の教えに従った者を除き、地震に襲われて滅んだ (7:73~79, 11:61~68, 54:23~31, 91:11~15)、或は雷電によって襲われて滅んだ (41:13, 41:17,



51:44, 69:5)とある。また、マスウーディーは本書の38章においてサムード族について次のように述べる[この部分は大半、前嶋信次氏の要約(『アラビア史』修道社, 1971, pp.48~49)を借用する]。彼らの国はシリアとヒジャーズ(al-Hijāz)との間にあり、西は al-Habashī 海(紅海)に及んでいた。Wādī al-Qurā の近く、シリアからの巡礼道に沿った Fajj an-Nāqa にあった彼らの住居は岩山を刻んで作ったもので、今も残っているから、彼らの栄えていた頃の跡がありありとわかる。その岩壁に刻した家の門口は小さく、我々の時代の家屋と大差はないから、伝説ではサムード族は巨人の集まりだったように言われているが、実は我々と同様であつたらしい(§929)。サムードの最初の王はサムードの子アラムの子ゲテルで200年も位にいた。その後を継いだのはサムードの子アラムの子 adh-Dhabīl の子‘Amr の子 Junda‘で、少なくとも290年間も王位にいた(§930)。アッラーが年若い預言者サーリフをこの民に与え給うたのは Junda‘王の時で、真の神の教えを説いたけれども、ほんの少数の者しか耳を傾けなかった。やがてサーリフも年老いたが、サムード族の不信行為はいや増すばかりであった。ついにはサーリフに向かって、何か奇跡を見せよという難題を吹きかけ、彼の口を封じようとした(§931)。やがてサムード族の祭りの日が来た。例のごとくその偶像を飾り立て、皆で相談した後、主だった者達がサーリフのところに来て「サーリフよ、もしそなたの説くところが真実ならば、この岩から、10か月の子を身籠った黒い雌駱駝を出してみよ。黒毛に赤い光沢を帯び、鬣もあり、額には長い房毛が下がったのを」と言った。サーリフがそこで主の御加護を祈願したところ、たちまちに岩が揺れ動き、その中で呻き声がした。やがて岩は割れて、彼らの要求どおりの駱駝が出てきた。更にその後から親とよく似た子が出てきた。この奇跡を見て、国王 Junda‘を始め大勢の者がサーリフの教に従うようになった(§932)。その駱駝はサムード族の全員が飲むに足るほどの乳を出したけれども、沢山の草と水を必要としたので人々は困ってしまった。とうとう‘UnayzaとSadūfという2名の美女に唆された9名の男達は、親子の駱駝を襲って殺してしまった(§933)。それは水曜日のことであったが、サーリフが彼らの行為を見て、天罰が下ると威かすと、彼らは彼を嘲って「そなたの主は一体いつ俺達を罰し給うのかね」と言ったので、サーリフは「木曜の朝にはそなた達の顔は黄色く変わり、金曜には赤くなり、土曜には真黒くなり、日曜には天罰が下るに違いない」と答えた(§934)。9名の男はサーリフを亡き者にしようと、夜になっておしかけたが、天使達が男達の上に石を雨のごとく降らして妨げた。そして翌朝には彼らの顔は黄色くなり、人々はその威しが本当であることを確信した。サーリフは日曜の前夜に僅かの信者と共に、その地を去ってパレスティナ(Filastīn)の ar-Ramla に移ってしまい、日曜には天罰がサムード族に下ったのである(§935)。アッシリアの円筒文書にサルゴン2世がB.C.715年に破った相手として登場する Tamudi 族や、プトレマイオスの『地理学入門』(2世紀中頃)に登場する、Thamyditai 族(VI, 7, 4)や Thamydenoi 族(VI, 7, 21)は、サムード族ではないかと思われるが、恐らく、下記のヒジュルを中心とし、岩山に穴を掘って生活していたようであり、ヒジュルや al-‘Elā’などで、彼らの碑文なるものが発見されており、独自の文字を持っていたと言われる。Van den Branden に拠ると、彼らは北部および中部アラビア一円に拡がっていた雄族で、その存在は前記のサルゴン2世時代の記録に既に現れており、彼らは少なくとも5世紀まで北部アラビアに住んでいた証拠があり、ムハンマドの時代にメッカの東南東 at-Ṭā’if のオアシスを支配していた Thaqīf 族などはサムード族の子孫と認められているという(*Histoire de Thamoud*, Beirut, 1977, pp.7~30 [前嶋信次「古代アラビアの二民族—アードとサムード—」〈注122〉pp.20~24より])。ヒジュルは、クルアーン第15章の名で、第80節に、ヒジュルの住民も使徒達を嘘つき呼ばわりしたとある。アラビア半島北西部、Taymā の南西約70マイル、Madā’ in Ṣāliḥ の近くに廃墟がある Hījr Ṣāliḥ (おおよそ北緯26°45′ 東経37°50′)を中心とした地(cf. Yāqūt, II, p.221)で、プトレマイオスの『地理学入門』にある Egra (VI, 7, 29)と思われる。

[紙幅の都合上、以下の注は先送りとなる。なお、当3章には、前嶋信次先生の要約があり(『アラビア史』〈注124〉pp.6~11)、本学のアラビア語学科でも、かつて(1977年)小西薫君が卒業論文で、3~5章の翻訳を試みている(Meynard & Courteille 版とその仏訳による。)]

(1991. 5. 13 受理)